
Silent—サイレント—

アダムの肋骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i l e n t―サイレント―

【Nコード】

N 2 1 5 0 D

【作者名】

アダムの肋骨

【あらすじ】

僕の名前を探してくれますか。…たとえば見つかったとしても、見返りは期待しないで下さい。

プロローグ あなたへ

突然ですが――

僕は人間です。

名前はありません。

理由は定かではありません。

ぶしつけに失礼なのですが――

僕の名前を探してくれますか。

僕と一緒に探してくれますか。

お暇でしたら是非探してください

見苦しいのですが――

僕は僕の名前を探しに行きます。

例えたどり着いた場所に僕の名前も僕自身さえ見つからなかったとしても、

僕はその少しの希望のために、ちょっとした冒険に出ようと思います。

たとえば見返りがなかったとしても、

怒らないでください。

たとえばゴールにたどりつく前に君が死んでしまったとしても、

呪わないで下さい。

たとえば僕を見失って、深い森の中で迷子になってしまっても、

僕は君を迎えには行きません。

僕は一切、君の生命の保証はいたしません。

それでもいいというのなら、

僕の良いパートナーとして名前探しをしに冒険に出ましよう

君は僕についてきてくれるだけでいいんだ。

ただ僕はひとりぽっちじゃあ、さみしいだけなんだ

だってひとりぽっちじゃあ、僕の名前を呼んでくれる人なんていないだろう？

だから君と名前を探しに行くんだ。

こんな僕を少しでも愛してくれるというのなら

僕も君を愛しましょう。

君が愛してくれるなら、僕は絞め殺されたってかまわない…

君が愛してくれるなら、僕の最期がどんなに悲しい結末になっても
かまわない…

ただ、

君がいつもそばにいて、

そして僕が無様な最期を迎える前に、君の声で名前を呼んでほしい
だけなんだ。

さあ、一緒に幻の宝さがしに出かけよう。

僕を盲目的に愛してくれる人――

No. 1 ホンネ

ずいぶん前、僕にはパートナーがいました。

女の子でした。

綺麗な女の子でした。

その子は僕を愛してくれました。

だから僕もその子を愛しました。

しばらくして――

僕はその子を殺しました。

理由はきっと、その子が僕の名前を呼んでくれないということを知ったからでしょう。

――しゃべれない子でした。

いつでも僕に黙って付いてきてくれました。

いつでも笑顔で僕を幸せにしてくれました。

今思えば、その子が僕を1番愛してくれていた気がします。

その子は、いつもマシユマロの成る木の根元でひなたぼっこをしていました。

ブロンドの髪が太陽の光に透けてきらめいて見えるのです。

だから僕はその子連れて冒険に出ました。

その子が僕とどこかへ行くことに承諾をした覚えはないけれど
笑顔で僕を見ていることを勝手に了解と解釈してその子をつれて僕はここまで来たのです。

綺麗な子でした。

それはもう綺麗な子でした。

ブロンドのゆるい巻き毛が今でも鮮明に瞳に映し出されます。

茶色の瞳だったことだって覚えています。

そして僕はいつでも悔やむのです。
心底悔やむのです。

そして思うのです。

僕は表面上その子を愛していたつもりでいたけど、

僕は本当にその子を愛してしまったのかもしれない。

愛されたかったのに、

愛してしまったのかもしれない

もしかしたら、

僕は愛されてなかったのかもしれない

だとしたら…

あの子は殺されて当然だ。

僕はそう思った。

—そんなことより—

僕は探さなくちゃならない

僕は僕の名前を探さなくちゃならない。

あの子が殺されようが、誰が殺されようが、

僕は僕の名前を探します。

今だってこうして探しています。

いつになったら見つかるのかも分からない名前を今、探しています。

いつだったか、聞いたことがありました。

マシュマロの木の上でいつも太陽の光を浴びながら寝ているウサギに、

そのウサギは、

ウサギというにはあまりにかけ離れていました。

だって、

ウサギのくせに耳が短いんだもの

だって、

ウサギのくせに目が赤くないんだもの

だって…

だって…

白くて耳の短い緑目のウサギは、

いつだってこういいました。

『君は君の名前を聞いちゃあいけない。

他の人に聞いちゃ駄目なんだ。

自分で名前を見つけないくちやあ、それは君のものにならないんだよ。

』

意地悪だと思いました。

明らかに知っているような顔をして、ひどいと思いました。

ぼくはそれとなく頷いてみせたけど…

どことなくその言葉が、

あの顔が、

僕をドコカへ導いているような響きに聞こえました。

それと同時に、

僕をドコカへ追い出そうとしているように思えました。

あのエメラルドの目玉が僕にそう訴えかけたんだ。

その目玉を見て僕は、

本当に名前を探しに行かなければならないことを悟った。

くまなのかウサギなのかも定かではない未確認生物の目玉に説得された。

だから僕は今こうして此処にいる。

今、僕がいる場所は何処なんだろうか：

今の僕はただの迷子です。

誰か、僕を探しにきてください。

できればブロンドの子がいいです。

笑顔で僕を幸せにしてくれる子がいいです。

綺麗な子がいいです。

やっぱりあの子がいいです。

マシユマロの木の根元でいつも静かに咲いていた花になった子がいいです。

たしかその花の名前は『ナニ』です

やっぱり僕は、

ナニと一緒に名前を探しにいきたいです。

悔やめば悔やむほど、

僕はナニが恋しくなるのです。

僕に幸せだけを与えてくれた子。

自分を犠牲にしてもなお輝く子。

今度は僕を不幸にしたっていい。

お願いだから、

もう1度僕にチャンスを下さい。

今度はもう殺さないから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2150d/>

Silentーサイレントー

2010年10月12日07時44分発行